

## 今、大学院生に何が求められているのか？

—半壊する象牙の塔におけるアカデミック・リテラシーの向上にむけて—

研究代表者 高柳 充利 (D2)

教員 齋藤 直子

研究分担者 池田 華子 (D1)

石崎 達也 (D2)

古川 雄嗣 (D3)

宮崎 康子 (D3)

### 〔研究目的〕

私たちのコロキウムは以下のような問題意識により研究をおこなった。アカデミズムにおける知のグローバル化が叫ばれるなか、研究者を目指す私たち大学院生にも自分の研究を積極的に、広く発信していくことの重要性が問われている。しかし、自らの所属する研究会や学会といった狭い学問共同体の外に向けて研究内容を発信することは、実際的には困難な状況にある。その理由のひとつには、他領域との交流が少ないために、研究を互いに共有し研鑽していく場を設けにくいことがある。あるいは日本国外における研究交流に必要な外国語での研究業績を積み上げるための実践的な機会およびそのためのリテラシーが欠けていることも大きいと考える。

しかしまた一方で、京都大学大学院教育学研究科の過去数年の動向を振り返るだけでも、海外からの招聘教授を招いての講義の実施や国際シンポジウムの開催など、大学院生の置かれる状況は確実にグローバル化へと向かっている。さらに、2008年8月には、本京都大学大学院教育学研究科において、国際教育哲学会 (International Network of Philosophers of Education) が開催される。この学会へは国内外からの研究者および大学院生が参加し、外国語 (英語) での論文発表や議論の場が設けられる予定である。開催校である本学大学院生にも、積極的参加が望まれよう。

このように、わたしたち大学院生はいつまでも安穏とした態度で専門領域における研究だけに没頭してはならない。そこで本コロキウムでは、他領域・他文化の研究者との交流を通じ、外国語で自分の研究を表現・発信することを目的にすえた。それはすなわちそれぞれの研究に関する自国語および外国語での自己表現力を培うことでもある。今後さらにグローバル化するアカデミズムの流れのなかで、他領域・多文化の研究者との交流を通じて、国際的な研究能力 (アカデミック・リテラシー) を身につけるこ

とにつなげたいと考えている。

### 〔研究成果〕

各人が国際学会での外国語（英語）による論文発表を行うことを視野に、講座（領域）を超えてメンバーが集い、それぞれの研究分野における研究成果を外国語で作成し、その過程で情報交換・フィードバックを行った。最終的に各人が今後英語論文を投稿・発表するうえでの重要な布石となる英文をそれぞれにまとめることができた。

古川は、九鬼周造に焦点をあて、主体と客体の二項対立構造を、自己とその生における偶発的關係と捉え、それをアイデンティティーの不在乃至ニヒリズムと捉えたうえで、アイデンティティーの回復にかかわり、偶発性を必然化することを論じた。池田は、シモーヌ・ヴェーユの思想を起点に、沈黙の意味を再検討する英文を作成した。石崎は対話にかかわる言語の問題を、エマニュエル・レヴィナスの「対話」と「超越」の概念から問い直す論考を上梓した。宮崎はジョルジュ・バタイユを手がかりに、子どもの「遊び」の経験を、有用性の外側という領域を提示しつつ描写している。高柳は、スタンリー・カベルと、カベルを読むポール・スタンディッシュを読むことを通して、教師教育の再構築を模索する短文をまとめた。

当コロキアムのメンバーは、それぞれが研究の対象とする思想家を読むことにおいて、外国語と格闘している。そしてその研究の成果をかたちにする段階において、外国語との格闘はさらに困難さを増す。思想との格闘と、読むこと・書くことの格闘。当コロキアムにおいてメンバーが経験した苦闘の過程は、国際化時代の大学院生の研究において核心となる活動の一端であったことは疑いないといえよう。

### 〔研究経過〕

私たちのコロキアムでは、池田華子・石崎達也・古川雄嗣・宮崎康子・高柳充利の五名が、それぞれの学問的な関心の違いを超え、共有する問題意識—アカデミック・リテラシーの再考と向上—に焦点をあてて学びあうこととなった。教育学講座、臨床教育学講座のふたつの講座をまたいでのこうした試みは、講座の枠はおろか、従来の学問領域、あるいは国境を超えて自らの学問的探究の成果を発信することが求められる現代の大学院生にとって、またとない刺激となった。それが筆者の偽らざる実感である。また、私たちの共通の問題意識を考える上で、2008年2月に行われた、ロンドン大学教授ポール・スタンディッシュ氏による一連の講演は大変示唆に富むものであり、当コロキアムのメンバーは積極的に参加した。氏の講演は、読むこと・書くことに中心的に取り扱ったものであり、リテラシーという概念の再考を促された。こうして、いくつもの意味合いにおいて刺激的な研究の機会を与えられたことを、心より感謝する次第である。